

「オールド ブラック ジョー」のイメージ

藤原 道夫

会員から外国語の日本語訳について意見が発表されていることに刺激され、前から気になっていた外国語歌詞の日本語訳について「オールド ブラック ジョー」を例に取りあげ、私見を述べたい。先ず一般に歌われている歌詞（緒園涼子訳）を挙げ、続いて→の後に原詩の直訳を示す。

若き日はや夢と過ぎ →私の心が若々しく、うきうきしていた日々は過ぎ去った
わが友みな世を去りて →私の友達は綿畑から去ってしまった
あの世に楽しくねむり →この地上から、私の知っているもっといい所へと去っていった
かすかに我を呼ぶ →友達が優しい声で私に呼びかけているのが聞こえる
オールド ブラック ジョー
我も行かん →私も（そちらに）行きます まもなく私も行きす
はや老いたれば →私の（首が曲がり）こうべが低く垂れてしまうのだから
（繰り返し）

歌の原詩から、次に様なイメージが浮かぶ。オールド ブラック ジョー は綿畑で働いていた黒人労働者で、若い時にはつらい仕事を苦にせずやりこなしていた。年をとって仕事を引退する頃に、友達が次々と亡くなっていった。ジョーは敬虔なキリスト教徒で、日曜日に教会に通い、この地よりもよい天国のことを学び知った。友達は今そこにいる。自分も老いて首が曲がり頭は下向きになってきているのだから、死期が近いと感じる。天国にいる友達が自分の名を優しい声で呼んでいるのが聞こえてくるようだ。私もすぐに行きますよ。

歌にはメロディーがあり、それに合う歌詞がついている。その原詞をメロディーにのせて歌いやすい日本語に訳すのは、至難の業といえるだろう。「オールド ブラック ジョー」の場合、自然に歌える日本語になってはいる。しかしながら、黒人労働者の持つ宗教性は全く消し去られている。とはいえ、訳詩に宗教性を盛り込むのははなはだ難しいだろう。ここで二つの方向が出てくる。一つは原語にこだわらず日本の歌として歌う、もう一つは原語で歌うことに慣れる。私は後者に固執したい。